

京都大学	博士（地域研究）	氏名	石内 良季
論文題目	東ブータン農村社会の歴史と社会変容に関する民族誌		
(論文内容の要旨)			
本論文は、2022年から2024年にかけて、東ブータンのガムリ川流域に位置するタシガン県バルツァム郡で実施した住み込み調査を基盤とし、人口減少が著しく進む地域社会の過去と現在を、社会・生業・宗教の相互作用を通して「人間の秩序」が動態的に形成される過程として記述・考察した民族誌である。本論文は序章と終章を除き、全3部6章から構成されており、第1部で地域史の再構成、第2部で「仏教と商業」を軸とした地域発展の分析、第3部で人口減少と社会変化のなかで生きる人々の現状の検討がなされている。 第1部では、歴史資料と口述資料をもとに、ガムリ川流域農村社会の形成過程が描かれる。第2章では、東ヒマーラヤ各地からの人々の移住が言語や文化の多様性を生み、バルツァムの社会的空間を特徴づけてきたことを示す。かつてこの地域は、ラセ・ツァンマに由来する氏族をはじめとする谷ごとの豪族によって支配されていたが、17世紀にドゥク派による統一が進むと豪族の影響力は衰退した。この変化はその後、重税や疫病、聖地信仰の高まりと相まって人口流出を引き起こし、地域社会の再編を促した。その後19世紀末には、周辺地域からツァンラやクルテップなどの移住が進み、今日の集落構成や言語分布が形成され、バルツァムの社会的多様性や地域間関係の基盤が築かれた。第3章では、1932年生まれの老翁メメ・ロプザン・イエシェの個人史を通して、20世紀における社会変動を描く。税制改革や近代化政策、チベット動乱および中印国境紛争による交易断絶は、地域社会に大きな転換をもたらし、住民はこれら急激な変化を「苦労した」経験として振り返る。 第2部では、1960年代以降の地域史を「仏教と商業」の観点から分析する。第4章では、初代バルツァム・ラマであるラマ・ペマ・ワンチェン（1923-1990）の活動を中心に、宗教ネットワークの形成が論じられる。彼はチベットでの修行を経て帰郷後、故郷と地域内外の高位ラマや王室とを繋ぐ仲介者として機能し、仏教教育の導入や民間信仰の統合を促した。この活動は、バルツァムの宗教実践と生業空間の再編につながり、人間の秩序形成に寄与した。続く第5章では、交易実践が地域発展に果たした役割を検討する。バルツァムはヒマーラヤ交易の中継地として栄え、生活物資や域外の部族ブラフミーの衣服などの取引で経済的活況を呈していた。しかし、チベット動乱後の国境閉鎖や道路開通、インド側経済の発展により交易形態は変化を余儀なくされた。こうした変化のなかで、バルツァムの交易人たちは商品構成の柔軟な転換を行ない、国内製造の酒類や電化製品などの取引によって新たな富を築いた。そこで蓄積さ			

れた財は寺院修復、子どもの教育支援、建設業への投資に活用され、宗教的実践と経済的繁栄を結びつける基盤となった。このようにバルツァムは、「仏教と商業」の相互補完によって、人間の秩序と地域発展を体現する社会となったと論じられる。

第3部では、こうした歴史的背景を踏まえ、人口減少が進む現代バルツァム社会を分析する。第6章では、悉皆調査による世帯構成・生計手段・耕作状況のデータを用い、人口減少に伴い「空き家」や耕作放棄地が増加している実態を明らかにした。住民はこの状況を「トンパ（空っぽ）になった」や「ボラン（森）が来た」と表現し、人間側の秩序の乱れとして受け止めていた。第7章では、宗教儀礼の変化を検討する。20世紀中頃から興隆した仏教儀礼は、住民にとって功德を積む重要な機会であったが、人口減少により継続が困難となっていた。これらの儀礼の衰退は単なる儀礼縮小ではなく、地域の統合的秩序の動揺として住民に認識され、社会的緊張や災厄の要因ともみなされた。

終章では、以上の分析を総括し、「消えゆく」地域として語られるバルツァムに生きるとは何かを考察する。バルツァムは「仏教と商業」によって人間の秩序を築き発展してきたが、人口減少や宗教儀礼の衰退により、その秩序は揺らぎつつあった。住民は過去の「苦労」を功德と同様に発展経験として捉え、困難な生活を誇りとして共有してきた。しかし今日では、仏教的価値の実現が困難になったため、「苦労」は未来の発展よりも現実を受け入れ耐え忍ぶ美德として語られるようになった。バルツァムの人々は厳しい現実を受け入れつつ善行を継続することで、「消えゆく」地域においても仏教的価値を保持し、生き続けているのである。本論文は、こうした二重の価値構造—現実受容と善行・功德の積み重ね—を通じて、現代東ブータン農村社会における人口減少と住民の生活のあり方を理解する必要がある、と論じる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は東ブータンのガムリ川流域に位置するタシガン県バルツァム郡で、2022年から2024年にかけて実施した長期フィールドワークにおける参与観察、インタビューおよび、その際に収集した史資料をもとに、人口減少が著しく進む当該地域社会を、地域史および社会・生業・宗教の視点から記述・考察した民族誌である。第1部と第2部において、地域史の再構成がなされる。特に第2部では「仏教と商業」を軸とした地域発展の動態が分析される。第3部で人口減少と社会変化のなかで生きる人々の現状が、調査村落における世帯構成・生計手段・耕作状況についての悉皆調査や、豊富な口述資料を通して記述・分析される。

本論文の学問的意義として次の5点が挙げられる。

第1にブータン地域研究における「民族誌的空白」への学術的貢献である。ブータンは伝統的に外国人研究者の入国を制限してきたこともあり、長期の現地調査にもとづく地域研究の蓄積はいまだに少ない。実際に行われてきた研究も、政治的中心が置かれた西・中央ブータンに偏りがちであった。そのような状況の中で本研究は、これまで調査やアクセスが困難であった東ブータン（タシガン県バルツァム郡）を対象としており、ブータン社会の形成について新たな資料を提示している。「民族誌的空白」を埋めて、ブータン地域研究を一段先に進める極めて貴重な基礎研究となっている。

第2に、本研究が、計729日（約24ヶ月）に及ぶ長期で、質の高い臨地調査に基づいているということである。著者は東ブータンの言語であるツァンラ語を習得するだけでなく、ブータンの国語であるゾンカ語や東ブータンの一部地域で用いられているチョチャンガチャ語も駆使しながら、住民と対話を重ね、人々の詳細な語りや生活の内実をとらえることに成功している。

第3に、多角的な資料の統合である。チベット語の古典的な歴史文献と、地域住民による口述資料（ライフヒストリー）を照合することで、国家レベルの「正史」には現れない、東ブータン一農村の重層的な形成史をミクロな視点から明らかにすることに成功している。地理的条件や近代国家の形成、交易経済、宗教といった地域形成を後押ししてきた諸要素を多角的な資料の統合により解きほぐしており、ブータンのみならず、ヒマーラヤ地域の形成史に対して大きく貢献する。

第4に、独自の分析枠組みの提示である。当該地域の発展を支えた要因を「仏教と商業（交易）」の相関関係から解き明かした点は、ヒマーラヤ地域における民族誌的調査にもとづく地域研究として高い独創性がある。さらに、現在進行形の人口減少や過疎化を単なる統計の問題とせず、住民が抱く「徳（功德）を積む機会の喪失」といった宗教的価値観を介した「消えゆく」景観の解釈として論じている点も、ブータン民族誌および人口減少社会研究への特記すべき貢献である。

第5に、ブータン農村の現代的動態の綿密な記録である。コロナ禍明けの2022年7月からわずか1年間のあいだに、ブータンの全人口の約2%がオーストラリアのビザを取得して国外移住するという「オーストラリア・ラッシュ」や、ジャガイモの商業栽培への移行、行政制度の変遷などを含む今日のブータン農村の現在進行形の変化の動態を、現地における共時的な調査と情報収集にもとづいて記録している。この点で本論文は、将来的な比較研究の基盤となる高い資料的価値を有している。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2026年1月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。